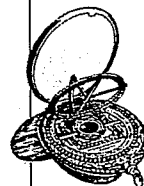


特集「国際化時代と宗教」

Feature: The Age of Internationalization and Religion



対談

日本社会の「国際化」と文化構造

加藤周一・河合隼雄

経済の国際化と文化摩擦

加藤 いま日本で、盛んにいうところの「国際化」という言葉、その意味はいろいろあつて、人により違うと思うんです。その一つは、はっきり定義されていて、明瞭な現実を踏まえている。つまり、高度経済成長以来の傾向として、国際的な結びつきが強くなってきているということ。その結びつきの内容には、ここで詳しく入る必



河合隼雄氏

要はないと思うけれども、その一つは対外貿易、こちらからたくさん買い、たくさん輸出するから、国際化ですね。それから、技術交流が拡大して、具体的には特許が飛び交っている。次に最近、加わってきたのが、日本の資本が外国に出るという、資本投下面での国際化。これには外国人が日本の各種市場や企業に入ってくるという側面も含まれてるでしょうが、日本人が海外にいく、一緒に会社を作ったり、外国の会社や不動産を買収したり……。そういう傾向が強くなっているでこれらの全体を一言でくれば、まあ経済的国際化とはいえるでしょう。

しかし、そういう経済的国際化を前提として、貿易摩擦があるうえに、外国人との接触にも摩擦があり、いろいろな問題が出てくるから、外国のことを、もっと知っているほうがいいんじゃないかというので、これは実態上の国際化ではなくて、当為上の国際化かな。もっと日本人の態度とか、考え方が国際化したほうがいいだろうという意味での国際化の問題が、今の経済的な現実からんで出てくると思う。



加藤周一氏

で、そちらはどうなっているか、といいますと、私の印象では、非常に矛盾にみちているという事です。一方では国際化したいという欲求がいろいろあるだろうけど、他方では閉鎖的なところが非常にあるような気がするんです。いかがですか。

河合 そう思います。日本は掛け声が好きで、国際化も掛け声の一つになっているのですが、実際に人と人とが接したら、なかなか簡単にはいかない。極度に単純な人は、西洋人の考え方ではもうダメだとか、おかしいとか、そういうふう切り捨てがちでしょう。状況としては、経済力というパワーによって、むかし軍隊が攻め込んだ

時に似たようになっていく。そのパワーを背景にして、自分たちの考え方を平気で押しつけてみたり、向こうの人たちの考え方をこっちがおよそ理解しないままでやっている、ということが随分多いように思います。

加藤 日本の経済力がこの程度に大きくなりえたということは経済的な国際関係が密接化しているということと切り離せない。日本のGNPの巨大化は、その意味での国際化を条件の一つにして成り立っているけれども、GNPが巨大化すると、それは一種の力だから自信がついて、だんだん威張りだし、それで国粹化へむかう傾向がみられる。だから、国粹化のなかで国際化を叫んでいる……。最近の十年、殊にこの五年ほどは同時にこの二つのことが出ていて、これが一番大きな矛盾ではないでしょうか。

河合 そうです。その国粹化は国際化とは全く反対のものですね。日本の国、国民、国民性、そういうものをも一つ突っこんで、もっと深いところへいけば、ほかの国、ほかの人たちとつながってくるでしょうし、そこまできかなければならないと思いますが、そこまできかな

えなければならぬと言っているのは、ないみたいです。これが不思議なことなんです。英語のほうは自民党の偉い人でもそういうことを言うくらいだし、国際語としての評判も高いでしょうが……。

そう思ってみると、広告でもそうですが、殊にTVではアナウンサーがなにか言うときに、英語圏の人には決してわからないように言いますね、人の名前でも、地名でも。日本人の多くが英語を習いたいんだつたら、米国の地名くらいは米国人が聞いたときに、どこの町の話をしているのかわかる程度に発音したらよさそうなものなんだけれども、そうではない。米国人には、絶対、どこの話をしているのかわからないように発音するでしょう、職業的なアナウンサーが。

そういう職業人は訓練されていますから、あれは偶然そうなるのではなくて、外国人にはわからないように発音する訓練の結果でしょう。それは国際化の反対だろうと思うんです。外国では、ドイツ語圏でも、英語圏でも、外国語は、なるべく正確に発音しようと努力しているのに、日本では全然逆に、なるべくわからないように努力

くて、歪んでしまい、日本だけが特別なのだということを言い出しますから……。

加藤 いったい国際化したいのか、したくないのか、どっちなのかが、不明瞭です。その矛盾の極端な例が元号ですね。国際的な年号は西暦でしょう。で、今までは併用してきたのが、だんだん元号一本に絞ろうという傾向すらないわけではない。

ということがあるし、もう一つは、日米関係の強化という面があると思うんですね。国際化という場合は、朝鮮半島との関係、中国との関係、東南アジアの人たちとの関係もあるのに、国際化というときは、日米関係だと思っている人が随分いる。元大臣でも、非常に国粹主義的なことを言う人がいる。日本は悪いことをしたんじゃない、中国に攻め込んだのじゃなくて、両方悪いんだというようなことを言う人がいて、その人はまた、しかし、自分も国際化は十分考えている、文部大臣として一番やりたいことは英語教育だ(笑い)、と言ってます。

実質的には英語を習うことが国際化だ、と考えているらしい。国際化が大事だから日本の学校でも韓国語を教

している。

その心理的な効果としては、毎日のTVの影響というのは圧倒的ですから、日本では結局、民放もNHKも協力して、日本国民は外国語を外国人にわかるように発音できない、したがって外国人とのコミュニケーションは不可能であると、説得していることになりますね、毎日組織的に……。

それと英会話が流行ることは、いったい、どう折り合っているのが、わかりにくい。

河合 英語で会話するというのは、その英語の考え方とというのが入らないと、本当はしゃべれないわけでしょう。ところが、その英語での考え方は抜きにして、なんとか英会話という技術みたいながあるかのような受け止め方が一般にあるんじゃないでしょうか。ばくの知っているアメリカ人が言うのに、日本人に英会話を教えるのはつまらん……。自由会話では、もう少し自分の考えたことを話してほしいと思うんだけど、それはほとんど出てこない、知的意見の発表にまではなかなかない、と苛立っていましたね。外国語を習得するのには、考え

方のパターンが多様になるという効用があるんですけどね、本当は……。

加藤 その例からいっても、日本社会の全体としては国際化ということで、こういうことを望んでいるのか、どうもはっきりしない。

河合 そうだと思えます。ですから、国際化というのは大変なことなんですけれども。

加藤 その意味では、外国は遠いという感覚、つまり鎖国心理でしょう。経済的関係、技術的情報交換の話はもういいでしょう。しかし文化的相互関係も含めての、全体の流れとしては、長く孤立していくと、摩擦のほうが大きくなるし、孤立していくことで先行きがうまくいくだろうとは思えないですね。

やはり日本の中だけのことでなくて、世界のなかの一つの国として、あるいは人間としても、ほかの国の人も人間だから、という考え方をし、そういう意味で、開かれてきたほうがいいと思うし、開かれてくる必要があると思いますけどね。だけど、それには長くかかりそうですよね。今のところは到底むずかしい。

加藤 拒絶ですね。日本人の有名な「礼儀正しさ」というのは、非常に柔かい人たちでの、話し合いの拒絶だと思ふんですね。で、会話のなかでも天気の話が無難ということになる。丁寧に、内容はむしろないほうが、害がないからいい(笑い)。

コミュニケーションの一つの形式は、喧嘩、だと思ふのです。だいたい喧嘩は議論しないで、いきなり殴る(笑い)——ちょっと誇張すると。普段は黙っていて友好的なわけですが、友好的じゃなくなってきた場合には、我慢に我慢を重ねて、いよいよ我慢できなくなってくると、いきなり殴る、というかたちなんです。

議論をたたかわせるという習慣はないんじゃないでしょうか。

河合 もう日本人に一番難しいことでしょう、議論をたたかわせるというのは。

加藤 極端に言えば、例の問答無用ですね、そういうことになる。その一番大がかりな戦いが戦争です。戦争か、そうでなければ従属的なべつたりでいくか、どっちかということになりがちでしょう。中間のところが難

河合 開かれるよりも、破局へいく感じが強い、と私は思いますね。

編集部 ですから、加藤先生が最近、ある文章のなかで述べられた、「国際協力にはもはや外圧を避ける方便ではなく、文化の『国際化』の当然の帰結となつたらしい」ということが、いまだはまだサビの利いた諧謔(かいぎやく)になるわけ……。

加藤 どうもそういう問題があるので、これは要するに日本人は仲間内だけで集まって話すということで、国内ですら部外者を入れることは減多にありませんから、ましてアウトサイダーとしての外国人に対しては閉じているわけですね。だから、まず国内でそれが変わってこないかぎり、そう簡単に国際化というふうにはならないと思うのですよ。

河合 そういう閉じた仲間内意識というのは、ものすごくいんですね。で、部外者とのコミュニケーションというところが非常に難しい。融合するか、謝絶するか、その二つに一つで、謝絶するときはきわめて礼儀正しく謝絶するということで。

しーんだ。

河合 ディスカッションというのは日本人にほとんど不可能なくらいですね。よほど訓練していかなければ、と自分でも思いますけど。

編集部 先ほどの「礼儀正しい拒絶」ということに関連づけていえば、家庭内暴力の発作性、子が親に対してどうしてそうなるのか、原因はむしろ父親にあるという点を河合先生はかねて指摘されていますね。

河合 子供のほうは、コミュニケーションを親に期待しているんです。しかし親のほうは礼儀正しく拒絶するばかりですから、子供は殴るより仕方なくなるわけです。子のほうは父親に、これを買ってくれとか、言っているわけでしょう。そのときに父親は、うちの家計はこうだから買えないと言うと、もう治まるわけですが父親はそれを言わないでしょう。その時に、子供の言ったことに言葉と言葉でがんばって対応していった親は成功しているんです。それをやってもらうように私たちは援助するんですけれども、なかなかできないんです。

しかし自分でも思いますけど、ややもすると、意識し

ていないと、思わず日本の礼儀のほうが出てきてしまうんです（笑い）、ほんとに。それほど僕らはもう小さい時から、そういうパターンを身につけてるんですけど、身につけてるといふ自覚がない、残念なことに……。

日本人の集団意識

加藤 子供じゃないかもしれないけれど、若い人のいわゆる世代論。世代論というのは、あんまり正確じゃないと思うけれども、事の本質は世代ではなくて、集団意識ですね、年齢別の。一定年齢の仲間というので、若い人が上の年齢のやつには話を通じないという態度をとるのも、この仲間（集団）意識の問題に含まれるのではないのでしょうか。

学生も含めて、ある一定の年齢の人たちは、大人には初めからわからないだろうとか、コミュニケーションが不可能という態度をとる。で、話を詳しく聞いてみると、二十五歳の人は二十歳の人が全然わからないと言いますね。

河合 言います、言います。

加藤 だから、私はそういうことについて書いたことがある。私は七十歳に近いから、わりあい年取っているほうで、核兵器に反対する。しかし、たとえ私が十七歳でも、やはり反対するでしょう。だって、核戦争がおれば、どっちもふつとんじゃうんですから。反対するなら両方とも反対していいし、賛成するなら両方が賛成していいわけだ。それから、例えば裁判の問題になった時は、民法に若者向きの民法というのは、ないでしょう。老人用の民法というものもない（笑い）。裁判は、年齢に関係なく、同じ法律でいかなきゃならないわけです。もうひとつ例えば、二次方程式の解はいくつあるかといえは、二つに決まっているわけで、それは年齢差にも性別にも国籍別にも関係ない。要するに、核兵器に反対する場合も、民法に関係する問題も、代数方程式を解くにも、また例えば京都の桂離宮、または修学院離宮の庭の出来映えの問題、それは見る人が若かうと老人であろうとそういうことは全然年齢には関係ないわけです。

つまり大切なことは年齢とは全く関係ないということになるから、若者文化というものは、存在しないという

加藤 それが、だんだん細くなっちゃってね、自分と同じ年に生まれたやつ（笑い）でないと、ダメだというような極端なことになる。そういうふうな年齢層を極端に細分化して、その間ではコミュニケーションが不可能だという前提に立つような態度をとるのは、若い人の側にもあるんじゃないかな。

河合 そのとおりです。その傾向は、いわゆる思想化とは遠く、風俗化ですから、次の世代の風俗はどうか、ということになっていき、風俗が違いうから、もう違ってます、ということになるんでしょうね。

考え方なら、自分の考えを大人はどこまでわかるかということになり、コミュニケーションへの相互努力がまだ可能でしょうけど、風俗が違う、となるともう、コミュニケーションの成り立ちが不可能を前提にして……。

これは、ジャーナリズムの人たちも言いたがるんですけど、なんとかの「時代」とか。

加藤 「新人類」とかね。

河合 あおつてるところがありますが、そういう傾向は破らないと……。

のです。あとは、せいぜい電車のなかで耳にイヤホンをして音楽を聞くか新聞を読んでいるか、という程度の違いなんです、そんなことはどうでもいいんじゃないか、話しができる範囲のほうをはるかに多いんじゃないか、ということなんです。私の生活感覚として、外国ではその意味で、いちいち年齢にこだわらないですね。

それと対比的にもう少し日本の社会を一般化していえば、一定の年齢層の仲間内にかぎらず、一定の階級内とか、一定の地域内とか、女性たちの集団内とか、そういう仲間内では、外とのコミュニケーションが難しいという前提から出発するのが、事の本質のあらわれではないか、と思うのです。

河合 そうです。ですから、仲間を限定しないといけませんから「共通一次試験の世代」とか「団塊の世代」とかいって、外側をある程度はつきりさせることにより自分が決まってくるということで、自分からは自分自身のことを決めないで、どの世代に属しているか、ということによって規定する。ジャーナリズムに迎合しすぎですね。

思いますね。

日本の宗教の構造

河合 それは、非常に難しい問題ですね。案外、徳川時代のころから考えて、そうであつたと言う人がいるかもしれないし、私みたいに、ずっと溯って神話の時代からそれを言うのもしかし……。

それに、日本は島国なんで、という立地条件もあるでしょうし、それともう一つ、仏教以前の日本の宗教にも関係してるんじゃないか、と私は思うのですが。そういうことをもつと掘り下げて考えてみる必要があるように思いますね。

で、私はそういう日本の特徴をもつともつと自覚すべきだと思ふんです。かと言って、西洋のほうがいいとは少しも言つてない。ただ、あまりにも違うと。その背後にはどうも宗教の問題が相当入っていると思つてゐるんですけど。やはり一神教の世界と、そうでない世界の差もどこかに入つてきている。しかし、そういうことを言うんだつたら、次にアジアはどうなのかと、これを言わ

ところ、いま加藤先生が言われたように、自分が核兵器に反対する人間なのか、賛成する人間なのか、自分のオピニオンから先行したら、そういうことは全然なくなるわけですよ。しかし、そうはしないというところが、日本人のすごい問題であると思います。その点を自覚もせずに、日本はもうずいぶん西洋化してるとか先進していると思つてゐるのですから。そういう点でいうと、新世代の学生なんかも、なにも新しくはないんですよ。ひと皮むいたら、すごく保守的なんです。

加藤 私はね、そういう仲間主義——みんな一緒に渡れば怖くない——という式のことを、集団主義と言つてきたんですけれどね。それは日本社会を観察する方の、河合さんもその方だと思いますが、私もそうなんです、外国の観察者もふくめて、かなり広く見解が一致する点ではないですか。みんなが認める事実ではないかと思うんですが、問題は「なぜだろう」ということでしょう。そうなる、いつもわかりにくい。どういう起源か、どんな条件がそうした集団主義を日本社会に生みだし、定着させてきたのかという、いろいろ難しい要素があると

なきやいけませんからね。そういうことも全部ふくめなきゃいけないんじゃないか。

加藤 そう、その場合、アジアはどうなったか、という問題が出てきます。わりに雨量の多い農耕社会ということで、伝統的に水田耕作のある国だから、というのであれば、アジアには日本のほかに水田耕作の国がありません。それだけでは、そう簡単には説明がつかないだろうと思います。

私は、宗教との関係では、こう思うのです。ある仲間があつて、そのなかで一人一人意見が違い、自分の考えがこうであり、仲間の姿勢に従わず、ことに少数で、極端な場合は一人で、こうだと決めるときは、やはり衆寡敵せずだから、なにか後楯がないとよくない。そうでないと呑み込まれてしまう。その後楯というのは要するに自分の所属集団よりもっと高い、それを超越する権威とか価値とかでなければならぬ。一神教の場合、それは絶対者として神みたいなものになるでしょう。しかし日本古来の宗教の構造には、はっきりと集団に超越する価値がないんじゃないか、そういう仲間集団を超越する

価値ないし権威に準拠することがないと思うのです。その対象がないから、という問題になるでしょうけれども。

ゆえに、そうした条件の下では、どうしても集団主義が大きくなるんじゃないか、という気がするんです。逆もまた真なので、もし集団主義が強ければ、その内ではその集団に超越する価値への準拠を抑えるように働くでしょう。超越する価値がないから集団主義になるんだし、集団主義だから超越的価値がないか、あつても、それとの関係が絶たれるという関係になる。

そういうことが車の両輪みたいになつて、歴史的な社会では、自分の所属している集団に、集団を超越するような絶対的な価値ないし権威がないということ。社会的にいえば、集団が個人にたいして甚だ強く、個人がその内に組み込まれるというか、インテグレートされる度合いが非常に高いということ。この両様の事柄は、観念的には価値観のレベルでの表現と、社会組織的な面での表現という、同じことの二つのあらわれであろうという気がします。

河合 西洋で集団主義といいますが、一つの超越的な権

威にむしろ全部なびいて集団をつくる、そういう集団ですね。日本ではそうではなく、非常に不思議な集団であって、みんな何に準拠しているかわからないわけです。西洋であつたら、極端な場合ヒトラーというものを中心にして集団をつくるのですが、日本のわれわれが言っている集団主義は、西洋のそういう集団主義と違うんですね。

加藤 違いますね。

河合 中心が、いわば中空構造になっている、そこが不思議なところなんです。

加藤 で、その場が、主として「地域」的なんじゃないでしょうか。もとは、日本の集団の原形は、家族っていうよりも……。

河合 家族ではないと思います。

加藤 村じゃないかと思うんです。だから地域的な村中心の集団……。

河合 おそらくそれが「世界」だったのでしょね。それしか世界がなかった、というような意味で。

加藤 ただ、西洋でも中世の村ではやはりそこしか知ら

ない、外には出られない、旅行なんかしない、およそ村のなかで皆一生暮らしていたということなんだろうと思うのですよ。しかし、その村には、超越的な価値があった……。

ですから、村の内部でその価値が集団に帰着せず個人を析出してくる、と思うのだけれど、日本古来の宗教はそういう価値を提示しないから結局、社会の内部にそのまま古いかたちが——つまり、初めは中世ヨーロッパの村にも日本の村にもあったものが——入ってきたんじゃないか。

河合 もう、ずっと残つてると思いますね。

編集部 それを日本の場合「場」に属する倫理という言葉で河合先生はいちおう表現されていますね。

河合 ええ、「場」というか……。

加藤 その場がもとは地域的であつたのが、のちには、資本主義社会になってからは、会社になる。——もちろんそういうことはあるだろうけど、その原形は村なんじゃないかと思うし、これは例えば中国とは違うと思うんです、中国は大家族主義だったのですから。

「村主義」と誠の倫理

河合 日本を自讃する人は、家族主義だから、というけれども、中国とか韓国なんかの家族主義とは全然違いますからね。それも、その点の自覚はなくて、ただ日本は家族主義ですばらしいと言っているようですけれども、そういう実体はむしろないと言ったほうがいいと思います。

加藤 私もそう思います。村主義ですね。

河合 非常に言語化しにくい「村主義」——ですから、あえて言語化したら「誠」ということになるんですよね、おそらく。しかも、その「誠」ということを非常にご都合主義で使うわけですから、西洋人からみると、非常にわかりにくい。

加藤 「誠」ですか。

河合 自民党の代議士が一番よく書く字だそうです。しかし聞いてみたら、なにかよくわからないそうですけれど。

加藤 ただ、私は「誠」というのは江戸時代からだと思

うんです、ずっと最近もそうですが。「誠」というのは一種の心的状態、心理的なものでしょう。その意味では内面的なもので、行為の問題よりも心の内面のある状態をさして「誠」というと思うんです。

河合 そうです。心の状態であつて、規範ではないんです。

加藤 そう、規範ではない。だけど、いい状態で、悪い状態ではない。価値としてはそうなっている。しかし、その内面のものが規範として外在化していないかぎりでは、主観的なものです。

河合 全くの主観です。

加藤 それを義理人情に当てはめると、その義理のほうは西洋人のいう規則に近くなり、「誠」は人情に近いでしょう。

自民党の人たちはたしかに今でも「誠心誠意」という言葉を使う。「来年度予算ではこれ削るんですか、削らないんですか」と問われたら、大臣が答弁に立って、「この問題については誠心誠意、対処する所存でございます」という調子のことを述べて帰っちゃうでしょ。そ

れを例えば英語で米国議会の場で言ったら、これはちょっと、そのまま納得する人はいないでしょう。「誠心誠意、対処する所存でございます」と述べても、予算を増やすか減らすか、ということには何にも答えず、まあ、不能状態に陥っているわけですから。

河合 しかも納得するんですから。

加藤 あれはちょっと、異常なことだと思いますね。私も、河合先生と同じで、いい悪いは別にして、違うってことははっきりしておかないと、いけないという考え方なんです。

河合 私は、日本の文化にかかわることを世界に理解してもらうためには、あの国会の議論の仕方をですね、逐次、外国語に訳して、こういうことを真面目に、全員真面目にやっている国なんです（笑い）、ということを知らしめていく必要があると思うんです。これをほんとにやったら、ものすごく理解がすすむと思いますね、ものすごい国だと……。

加藤 衝撃をあたえると思うんだ。ちなみに、「誠」という一字を旗に掲げたのは、幕末、佐幕派の近藤勇の新

日本のさっきの例でも、フランス人だったら、近藤勇を支持する人と、坂本龍馬を支持する人とは、まったく別でしょう。日本人のように、どっちも好きだというのは、ちょっと……考えられない。というのも、フランス人にはアンシャン・レジームを倒すか倒さないかが問題だし、それを日本に置き換えれば、佐幕か倒幕かでしょ。その問題が日本では、どちらでもいいわけで、要するに気持ちが大切である。その気持ちは「誠」だ、ということになるんじゃないかな。

その意味では徹底した主観主義です。どうして主観主義が徹底するかというと、フランス語の表現では、意図によって人間の行動の価値をはかるというのは、悪い意味になる。そのフランス語では悪い意味のことが、日本では「誠」なんだから、ぜんぜん悪くならない。だからそういう主観主義こそが日本の特徴なんじゃないかな、と思います。

そして、そういう特徴はさっきの議会での答弁にかぎらず、かつての金学連がいった「バリケードの青春」にも、よくあらわれていたと思います。そこには生きがい

撰組でしょう。それから藤田東湖のような、倒幕派の志士も「至誠天に通ず」といいましたね。ということは両方が「誠」なんです。維新の志士はもちろん幕府を倒そうという方だし、そういう謀反人を征伐するために幕府の傭ったテロリスト集団が新撰組です。幕府を命がけで護つても、幕府を命がけで倒しても、どっちでもいいということになるんです。いわゆる「誠」さえあればいい。早い話が坂本龍馬と近藤勇の両方に人気があった。

これが例えばフランスだったなら、いずれかの一方を択ぶと思うのですよ。事実、ポール・ヴァレリーが書いていることに、フランス革命にかかわったロベスピエールを支持するある婦人と、その銅像の前になるとその婦人が、これはフランス人民の声を代表した正義の人だと、非常に尊敬をこめて言ったというんです。しかし別の人と同じ銅像の前になるとその人は、こいつこそは、暴民を煽動し混乱を起こして、やたらに人の首をギロチンで刎ねた、もう一番悪い奴なんだと言ったというんです。だから、歴史というのは相対的なものと、ヴァレリーはいうんだけれど。

のようなものがあるでしょうし、それは完全に内面的な価値でしょう。つまり本人の感じ方の問題ではあろうけれども、その行為の社会的な結果となると、それにはまあ、いろいろな解釈があるでしょうが、とにかくバリケードをつくることで実際に、どういう結果を日本の社会にあたえたかということは脱落してしまふ。

河合 老若おなじパターンなんですよ。それで最後のところを何をもって納めるか、といいますが、結局、日本の美学になる、華々しく散ったとか。その結果が、社会的にどうなったかじゃないですね、散り方がきれいだったか、きたなかったか、ということに収斂してしましますから。

加藤 それが「誠」主観主義なんだなあ。なぜそうなるのか、河合さんのご意見をうかがいたいのですけど、私の考えでは、まず集団主義があり、それが特定の集団に属している個人にとって超越的なものとしてあらわれてくる。つまり全く動かせない与件としてですね。とにかく動かすことができないから、そのなかでもし不都合なことが出てくれば、自分の心のなかを変えるほかに仕様

がないので、ということは見方を変えるほかにはどうにもできないので、主観のほうに向いてくる。

たとえば、徳川幕藩体制というものが動かせないものならば、それを前提としたうえで、じゃどうしたらよからうかという、自分の気持ちのほうを変えようということになりますから、問題の受け止め方は主観のほうに集中してくるのが当然なので、その意味では集団主義を定理所すれば、その系として、主観主義的なモラルみたいな「誠」主観主義が出てくるのではないか。

それともう一つ、場というか、環境としての仲間の社会が自分にとって都合がいい場合は、辛い折り合いがつくだけでも、不都合な場合はどうするか。ということとは社会的環境にかぎらず自然的環境に対しても出てくる問題なんです、たとえば電車が混んでいて暑ければ西洋人の対応の仕方はだいたい、すぐ窓を開けますね。そういうかたちで対処する。

ところが日本ではだいたい、精神的訓練のほうが先なので、そっちのほうへ自分の心理状態を合わせていく。暑くてもがまんする心がけということになるでしょう。

恨みやなんかが残ってしまうから、というわけだね。

それにひきかえ、集団のそうした立場からすれば、そのメンバー全員にたいしては、先刻の「意図の倫理」についていうか、「誠」主観主義的な観点から対処したほうが集団自体の調和をたもつ、ということがある。

河合 それがありますね。ですから、その盗みの場合でも、一言「すみません」と言ええすればいいわけです。「すみません」というのは、集団「誠」主観主義にもういっぺん帰属いたしますということですから、では「もう結構」という赦しになります。

加藤 それが、日本的な集団の備えている、非常に巧妙な——その集団自体の観点からすれば、目的合理性のある——態度であり、よくいえば柔構造っていうわけでしょうが、その仲間意識にもづく集団主義と「誠」主観主義というのはいくついているんじゃないでしょうか。河合 そのとおりでしょう。そういうことを自覚せずに、全く異なる文化の構造をもつ国々、たとえば西洋と付き合うのに日本式のまま平気でやると、誤解されるのは当然でしてね。

そして、このことは日本型の集団主義の在り方と関係があるのではないかと、思っているのですが……。

河合 日本人は子供の時から、耐える訓練をすごくやってきているわけですね。忍耐力がないと、話にならない、耐えるということはすごく大切なんだ、と。自分が耐えずに、環境を変えようとか、何かに働きかけようとする子はいけない子で、黙って辛抱^{しんぱう}している子はよい子だ、というのはいささか単純な言い方なんです、今でも残存していますね。

加藤 それと同じことを集団のほうからいえば、誰かひとりと、変なやつが出てくると、そいつをどうするかという場合ですね、たとえば隣家の鶏を盗んでも、悪気ではなく出来心でしたのであれば、なるべく赦^{ゆる}す、という対応の仕方ですね。事をそのように心の問題に還元することで、再び盗まないことを期待して、規則をはつきり適用しないというほうが——気持はどうであろうと客観的に事実、盗んだのだから、それ相應の弁償をしろうというかたちで出るよりも——どうも多いのではないかと。いうのも、そういうかたちで出ると、彼の気持ちのなかには

権威と権力の分離

加藤 そこで日本独自の構造について、河合さんのご本のなかに「中空」という捉え方が提示されていますが、あれはおっしゃるとおりだと思うんですけど、ここで一つかがいいたいののは、その「中空」ということが、権威と権力の分離、あるいは正当性の中心と権力の中心の分離ということのあらわれじゃないか、ということが私の考える点なんです。

河合 なるほど。

加藤 たとえば象徴制天皇があるっていうような時には、それは、明らかに権威の中心であって、正当性の中心であるわけでしょう。しかし、それを権力の観点からみれば、明らかに権力の中心ではないんで、ただ権力の完全な中空ですね。

河合 ええ。

加藤 だけど、権力についていえば、権力の中心つてのはあるんじゃないかな。河合 ええ、そうです。

加藤 だから、その場の全体には、何もないというんじゃない、ただ權威の中心は權力の中心でないということ、そして權力の中心は權威の中心じゃないということ、故に、權威の観点から權力の中心をみれば「空」になっているし、權力の観点から權威の中心をみると、やはり「空」になっている、ということではないでしょうか。

河合 はあ、なるほど。それはおもしろいポイントですね。で、それを日本で二つ一緒にした場合はいつも変なことになる。

加藤 そう、二つ一緒にするとうまくない。

河合 その場合は、たとえば豊臣秀吉の時も、最近では戦争に負けるまでの天皇制も。

加藤 そういふのはうまくない。

河合 ですから、それを上手にやっているんですが、その中心はどうなっているのか、といわれますと確かに、気になりますね。いまはよう答えられませんが、考えてみたいと思います。

編集部 その論点についての河合先生の本を読んでみると、なるほど、これは独自日本の問題と思いました

集団に組み込まれていますね。そうすると、そういう集団のなかでの指導者っていうのはどうなっているのかという時に、指導者だけがその本当の個人になるでしょう、もし權威と權力が一致すれば……。しかし、それを分離すれば、その指導者さえもその個性が薄められるというんじゃないかな。

河合 で、個人であることを保持しようとする、絶対にやられるわけです。

加藤 だから薄めることで、やはり集団に帰属させてしまう。責任問題は集団全体としてあらわれてくるのであって、集団のなかのどういう個人にもあらわれない、これは指導者もふくめて、ということじゃないかな。

その結果が、最高の權威があつて、実權がない。万事の責任者であつて、何事にも責任がない。そういう型の無責任体制が、社会のさまざまな水準の、さまざまな組織に共通している。そういうことを私はかねてから主張してきたわけですが。

河合 そのところを日本人自身が間違つてしまい、日本人は權威に頼るからダメなんだという反省をしがちで

が、西洋の言い方では、ギリシャ思想以来でしょうか、「自然は真空を嫌う」といい、あるいは「神は真空を嫌う」という言い方をキリスト教ではしていますね。まあ、社会的現象はかならずしも科学や神学どおりにはならないでしようが、とにかく絶対的な真空というのは、まだ科学的にもつくり出せないわけでしょう。で、思うに、けんきょく牽強付会になるかもしれません、そのことを今のお話に当てますと、「空」になっているような状態だけれども、全く「空」になつてはいないし、絶対の「空」にはならない。なるかならないかの際になかが起きるといふ、その繰り返しではないでしょうか。

河合 そういう見方もあるでしょうね。私が思うのには、私の例の「中空」モデルでいうと、立体的には空なんだけれども、我々が意識化するときそれは平面に投影される。ですから、必ず何かの影が中心にある。だけど実際には、それが時が変わると動くんですから、つまり中心が変わっていく、ということなんですがね。

加藤 どうしてそうした分離が起こるか、というのは全面的な責任をもつ個人っていうものはいなくて、仲間内

ですが、実際はほとんどの權威がないから困るんじゃないでしょうか。みんなごまかしているんですね。仮に、自分が權威者だといえ、闊つて、やつつけられるわけで、しかしそれは言わないから、やつつけられないんですよ。しらんまにどっかへ消えうせていて、またどっかからのこのこ出てくるということはあるようですが……。

編集部 その意味では、中空構造といい、柔構造といい、それは生き残りのためには便利だと思ふのですが、今度は日本人が積極的に世界のなかで生きていくためには、むしろ邪魔になる要素が強いんじゃないでしょうか。国際化をいう以上、そういう意味あいの事をぜんぶふくめて、誤解されないためにも、河合先生が言われているように日本人自身による自己の深層の「意識化への努力」がまず必要でしょうね。

加藤 それが、いまなお、ほとんど知識人の任務なんじゃないかなと思いますね。

(かとうしゅういち・評論家)

(かわいはやお・京都大学教授)